設楽発掘通信

No.4
平成２６年
９月１日号

西地（にしじ）・東地（ひがしじ）遺跡の地元説明会開催決まる！

万瀬遺跡地元説明会の様子

西地・東地遺跡地元説明会のご案内

日　時　平成26年**10**月**4**日（土）午前11時～午前12時　雨天中止（小雨決行）
場　所　西地・東地遺跡発掘調査現場（設楽町大名倉字西地地内）
県道33号設楽瀬戸線（国道257号線から約4.8km）／設楽町営バス宇連長江線「大名倉」バス停からすぐ
内　容　確認された遺構の見学および出土遺物の展示（調査員による説明を行います）
主　催　（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
その他　参加は無料です。現地は足元が悪いので、動きやすい服装や履物でご参加ください。
問い合わせ先　愛知県埋蔵文化財センター調査課（担当：鈴木）鈴木携帯 **080-1571-4982**

去る八月九日に万瀬遺跡（川向所在）の地元説明会を開催しましたところ、台風十一号が接近するあいにくの状況の中、二十八名の方々にお集まりいただきました。発掘調査現場では、調査担当者が遺跡の概要や今回の調査成果などを説明した後、縄文時代の配石遺構を間近でご覧いただき、多くのご質問やご意見が寄せられました。また、遺物展示コーナーでは、縄文時代の土器や石器、江戸時代の陶磁器などを熱心に見学していただきました。

一方、七月から開始しました西地・東地遺跡（大名倉所在）の発掘調査も順調に進んでおり、縄文土器や石器が出土するなど大きな成果が得られています。万瀬遺跡に引き続き、十月四日に発掘調査の成果を現地見学する地元説明会を西地・東地遺跡の調査現場（B区）にて開催することになりました。万瀬遺跡の説明会を逃してしまった方も、この機会にぜひご参加ください。

さて、この万瀬遺跡と西地・東地遺跡の発掘調査では、多くの方々の協力がなくては作業が進みません。調査を統括する調査員の他に、発見された遺構や遺物の位置を正確に記録する測量技師、土砂を大きく運搬する重機運転者など様々な専門家が調査に従事していますが、最も重要なのは発掘作業員です。発掘作業員は、設楽町や新城市など地元の方々にお願いしており、遺構の掘削や土器の取り上げなど様々な作業を行っています。この夏から初めて発掘作業員を勤めた方も多く、現在（八月二十日）発掘作業員は二十七名在籍していますが、まだ発掘作業員を募集しています。遺跡の地元説明会を見学するだけでなく、実際の発掘作業を通じて太古の歴史にふれあうのもよいのではないでしょうか。（愛知県埋蔵文化財センター　鈴木正貴）

西地・東地遺跡の調査について

七月より大名倉地区の西地・東地遺跡の本調査を行なっており、現在は遺跡の北西部を調査しています（写真1）。

ここでは、昨年までの試掘調査で、縄文時代の石鏃や古代の陶器、中近世の陶磁器や中国からの輸入銭（宋銭）などが出土しました。調査のはじめに表土剥ぎ（遺跡に影響しない表面の土を取り除く作業）を行なった結果、縄文時代の土器・石器や江戸時代の陶磁器が出土しました。写真2は、石錘という石器の一種（魚を捕る網のおもり）が出土した状態です。この石の溝に網の縄を巻きつけて使っていたと考えられます。

調査区では、現代の石積に埋められる形でそれ以前の石積と整地された層が見つかりました。この石積が築かれたのは江戸時代頃と思われます。古来より斜面から土砂の大規模な移動や石を積む作業など、土地を切り開いて平坦にし、生活の場を確保した光景が伺えます。

（ナカシャクリエイテブ株式会社　樋田泰之）

写真1　作業風景

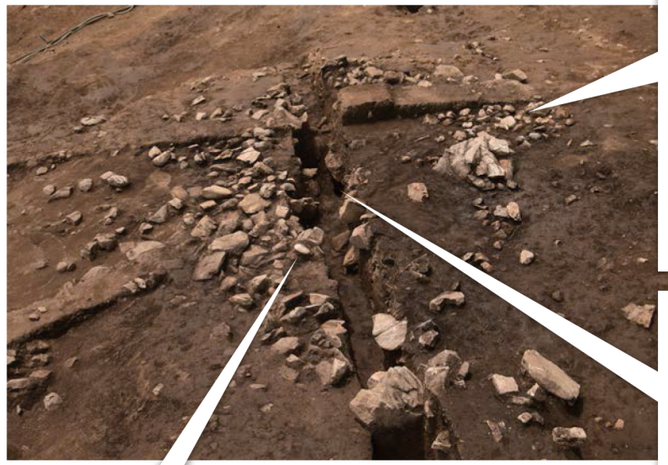
写真2　石錘出土状況

万瀬遺跡の調査について

万瀬遺跡では縄文時代の遺物や遺構が多く確認され、調査も佳境に入ってきました。特に、調査区の北西部では、縄文時代の遺物を多く含む黒色土（遺物包含層）が良好に残っており、慎重に掘り下げを行いました。すると、その一帯にだけ、たくさんの石の集まりが確認されました。石の大きさは拳程度のものから人の頭より大きなものまで様々ですが、自然に集まったものではないようです。よく観察すると、大きな石を基準にいくつかのまとまりや並びがあり、所々に縄文時代の土器や石器が混ざって出土しています。このように数個～数十個の石を何らかの規則性を持って配置した遺構は、「配石遺構」と呼ばれ、縄文時代のお墓やお祈りの場だと考えられています。実際に、縄文時代のお墓やお祈りの場でよく出土する注口土器の破片が出土しています。

現在、表面に見えている石だけで百点以上はありますが、おそらくこれで全てではなく、下層にまだまだ埋まっているようです。今後は、上部の石を一点ずつ記録し、慎重に取り上げを行います。そして、下層に埋まっている配石遺構の本来の構造を明らかにしていきます。

（ナカシャクリエイテブ株式会社　廣瀬正嗣）



配石遺構（北から撮影）

注口土器（注口部）

注口土器（口縁部）

敲石

注口土器

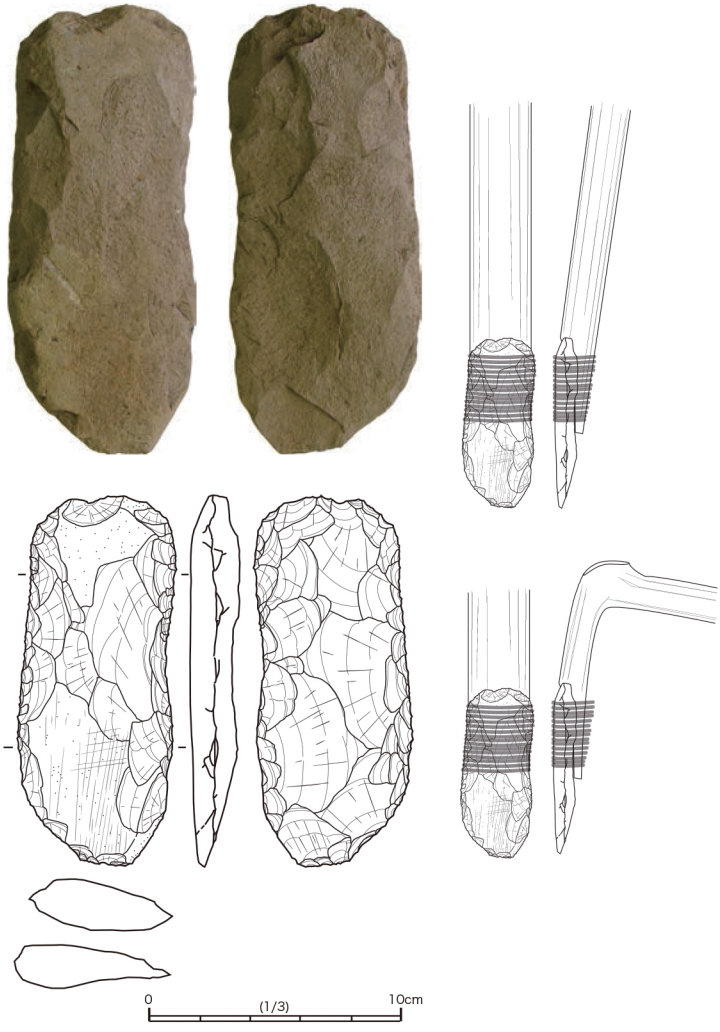
打製石斧について

縄文時代の人々は、さまざまな素材で作られた道具を用いて、狩猟・漁撈・植物採集をはじめ、いろいろな活動を行っていました。しかし、有機質の物質が残りにくい日本列島では、実際の発掘調査では、土器や石器など、当時使われていた道具のごく一部しか出土しません。今回は、その中でも打製石斧と呼ばれる石器について、取り上げます。

打製石斧は、剥離や敲打などといわれる、石を打ち欠くことによって作られた斧形の石器です。縄文時代でよく見られる石器ですが、東海地域では、縄文時代中期（今から約五千年前）以降に多くなります。打製石斧の大きさは、長さ十センチ程度のものが多いものの、小さいもので七センチ程度、大きいもので十五センチを超える大型のものもあります。

打製石斧は、民族事例などを参考に、土を掘る道具と、古くから言われています。使用する際は、打製石斧の一方に柄を固定した状態にして、石斧側を刃にして土に突き立てるように使用したと考えられます。柄への付け方には諸説ありますが、その中でも下右に示した方法が代表的なものです。竪穴建物などを作る時ばかりではなく、クズ・ワラビなどの地下根茎類の採取など、植物質食糧を獲得する際にも大いに使用されたと考えられます。

現在調査中の万瀬遺跡では、この打製石斧やこれに関連する剥片（製作の過程などでできる薄く剥がれた石片）が多く出土しています。使用されている石材は白色の安山岩で、石器の種類によって使われる石材を選んでいるようです。打製石斧の出土点数が多いことは、万瀬遺跡を営んだ人々が、食糧獲得など、どのような生活を送っていたのか考える上で、重要な視点となるでしょう。（愛知県埋蔵文化財センター　川添和暁）



万瀬遺跡出土打製石斧（左）と柄への着装想定図（右）

設楽発掘通信 No.4
平成26年9月1日号
編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017 愛知県弥富市前ケ須町野方802の24
電話 (0567)67-4161【管理課】 4163【調査課】
ホームページ http://www.maibun.com
Facebook https://www.facebook.com/maibunaichi
Twitter https://twitter.com/aichi_maibun
印刷・協力　ナカシャクリエイテブ 株式会社